

特46-993
1200500894998

特46
993

傘日絵

国立国会図書館

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

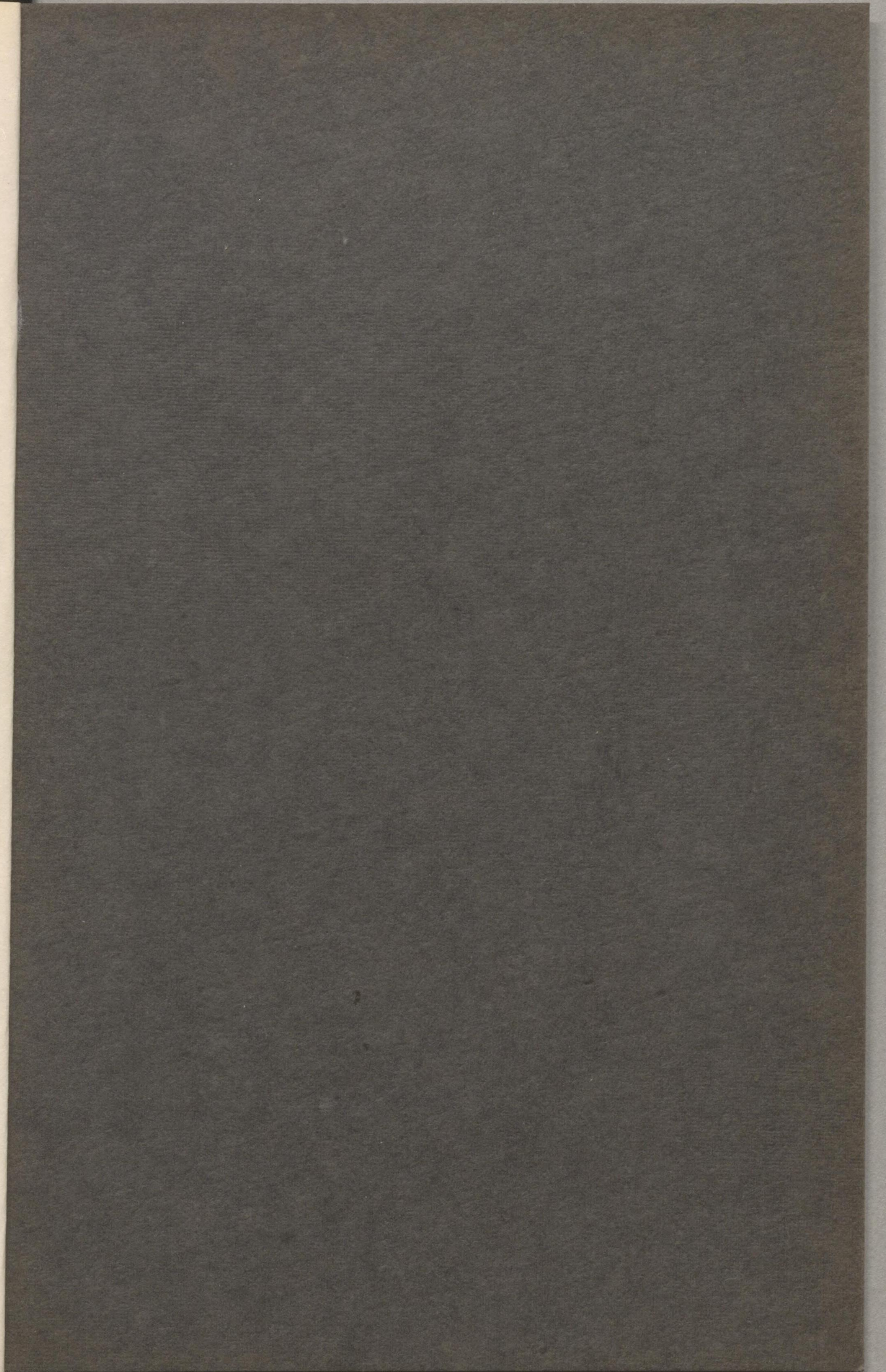
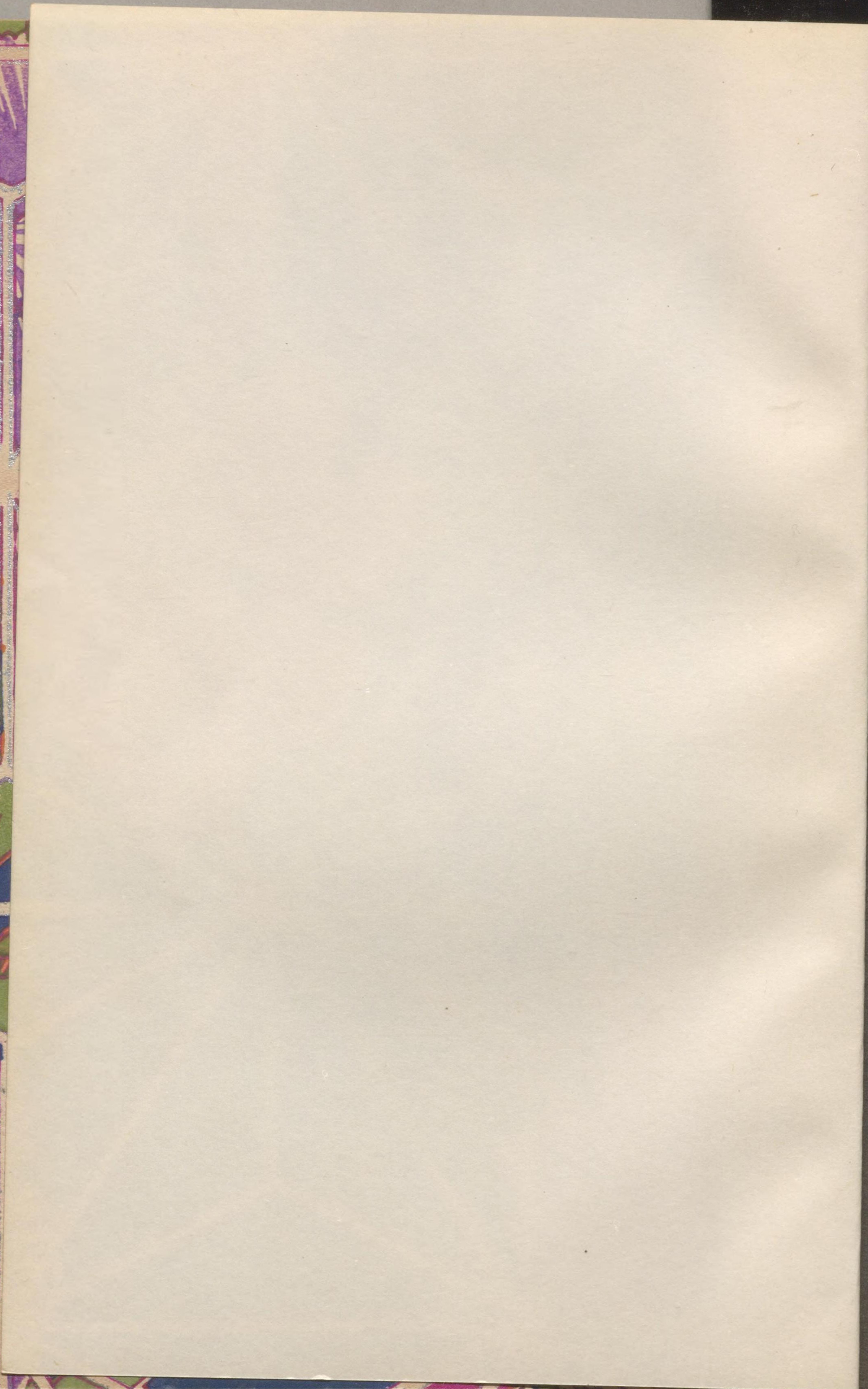


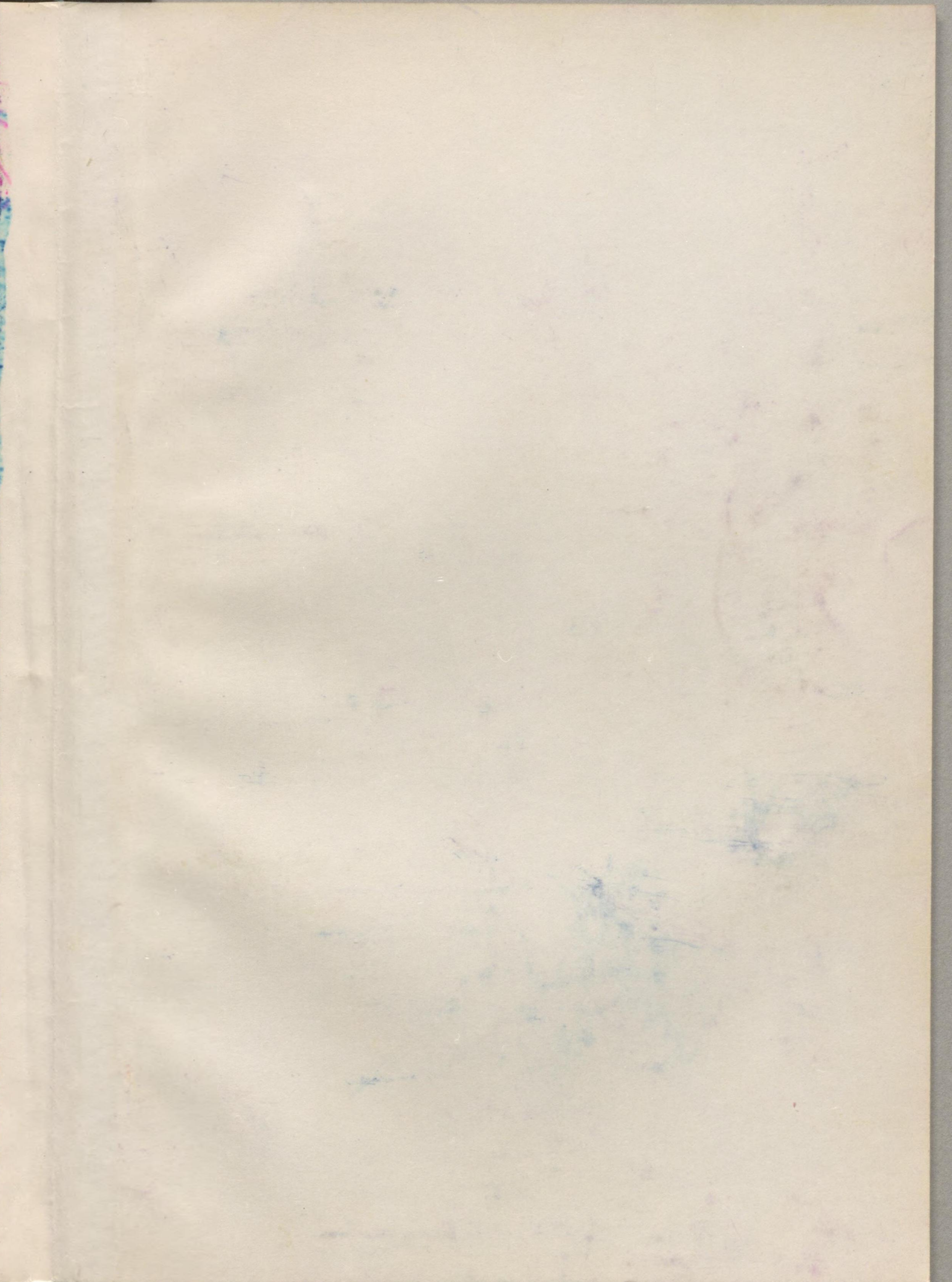
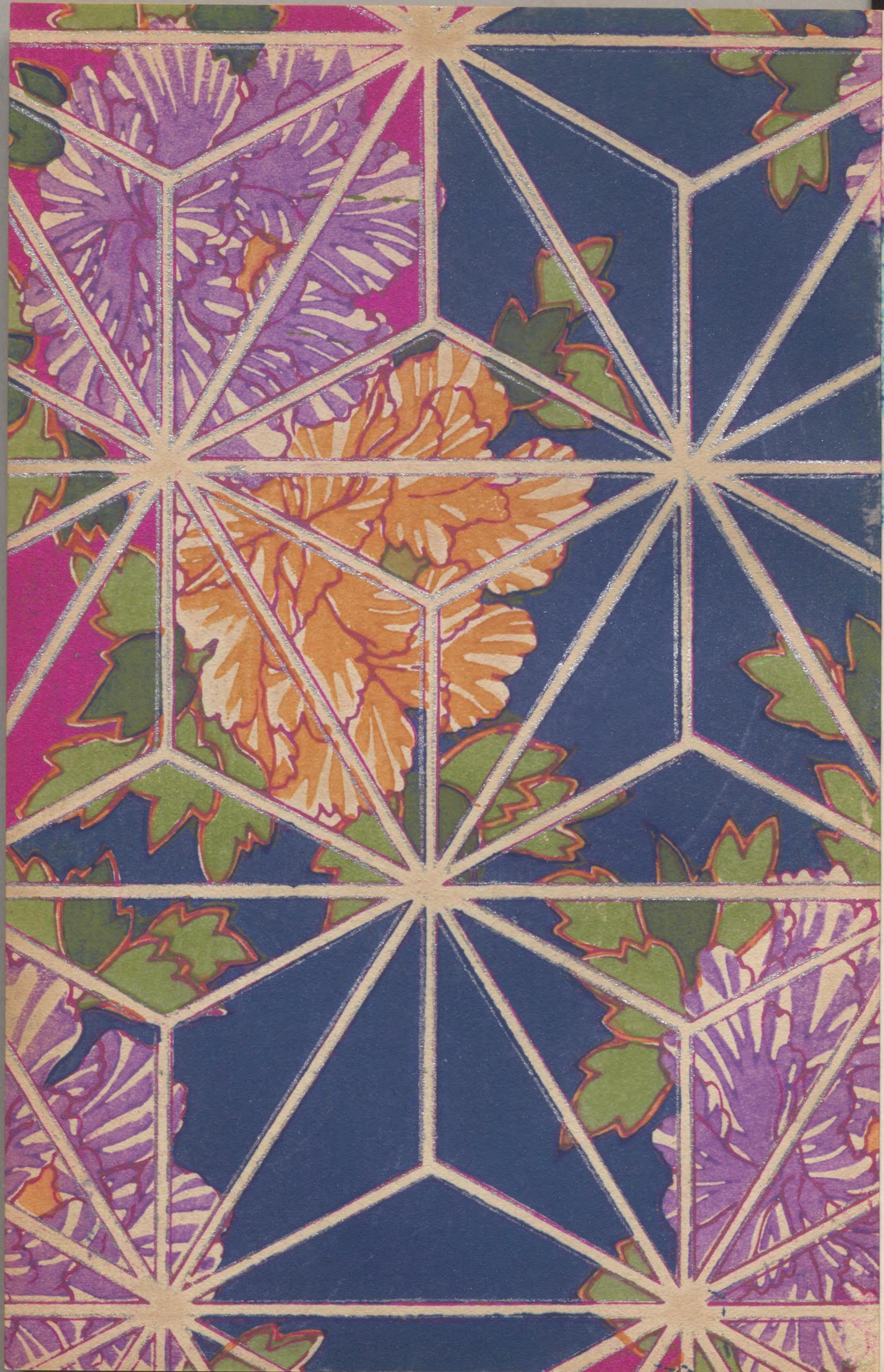
KODAK Color Control Patches

© 2007 Kodak. All rights reserved TM: Kodak. KP71082B

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9

Ruler: 1 2 3 4 5 6 7 8 (Inches) / 1 2 3 4 5 6 7 8 (cm)





特46
993



繪日傘

新皇
作





た稽古歸り

しつとりと重い空気が履の音がする。

もうた園さんの踊る時分かしたら、と見ると、たゞ静かき舞
 踊の影を、華やかな風采をした園さんの白い顔が、くつきり
 と目立つてゐる。繪日傘をたゝんで、た稽古本をかゝへた姿
 は、家の町にふさはしい。

小貝に似た花びらが、風もないのにほろゝちる。園さんの
 紅の帯にも裳にも、刺繍のやうに——うつとりと見上げた美
 しい眼には、キラリと露の玉が光つたやう。

親もない兄弟もない園さんは、無情な他人の手に、その美
 しさを増してゆく。



枝折戸

「ね、だから寄つて遊んでらっしゃるよ。」

英子は両から笑顔で迎へた。

「ありがたうよ。それより貴女いらっしゃるのな、そこまで御一緒だ。」

「ね、行つても好いけれど。」

「行きませうよ、寂しい所を二人で散歩するの、好いちやありませんか、出ていらっしゃいな。」

と、勝子は外から誘つた。

やがてこの枝折戸をくぐるのは、勝子だらうか將た英子だらうか。

大きな控樓門の柱を小楯にして、花屋のみつちやんは、小さな家庭をつくつた。お父さんもお母さんも、坊ッちやんも、お嬢さんも、一人で引きうけて活動してゐる。ブリキの庖丁は、柔らかな蓮華草を切るのには十分だし、敷石のた座敷には、淡紅色の花びらがちり散り、花毛紙を廣げたやうに美しい。

少主婦のみつちやんは、ほか／＼と暖かい春の日を音にあびて、お料理に餘念もない。開き切つた櫻がハラ／＼とこぼれて、みつちやんのリボンにも、おもちやの手桶の水にも浮んでゐる。





はるのこころ

米のやうに細い雨が、音もなくたゞ静かに、舞ひながら
 花びらの舞うを地になつてまかせて行。
 こましく、やうやく、まなつがし、花びらに、雨の血の
 る春の朝、毎朝、朝の目を醒めて、塗り下しの足、
 長く、花の香りを通りゆく二八の乙女、やはらかなるの
 何とかがあたる。
 此處にも、この花びらに、主になれながら、
 浦公英、あはれ、のが運命に倣たるよ。
 びんだ傘の上は、ヒラ／＼と散る花びらし、雨の
 思ひ出が多い。

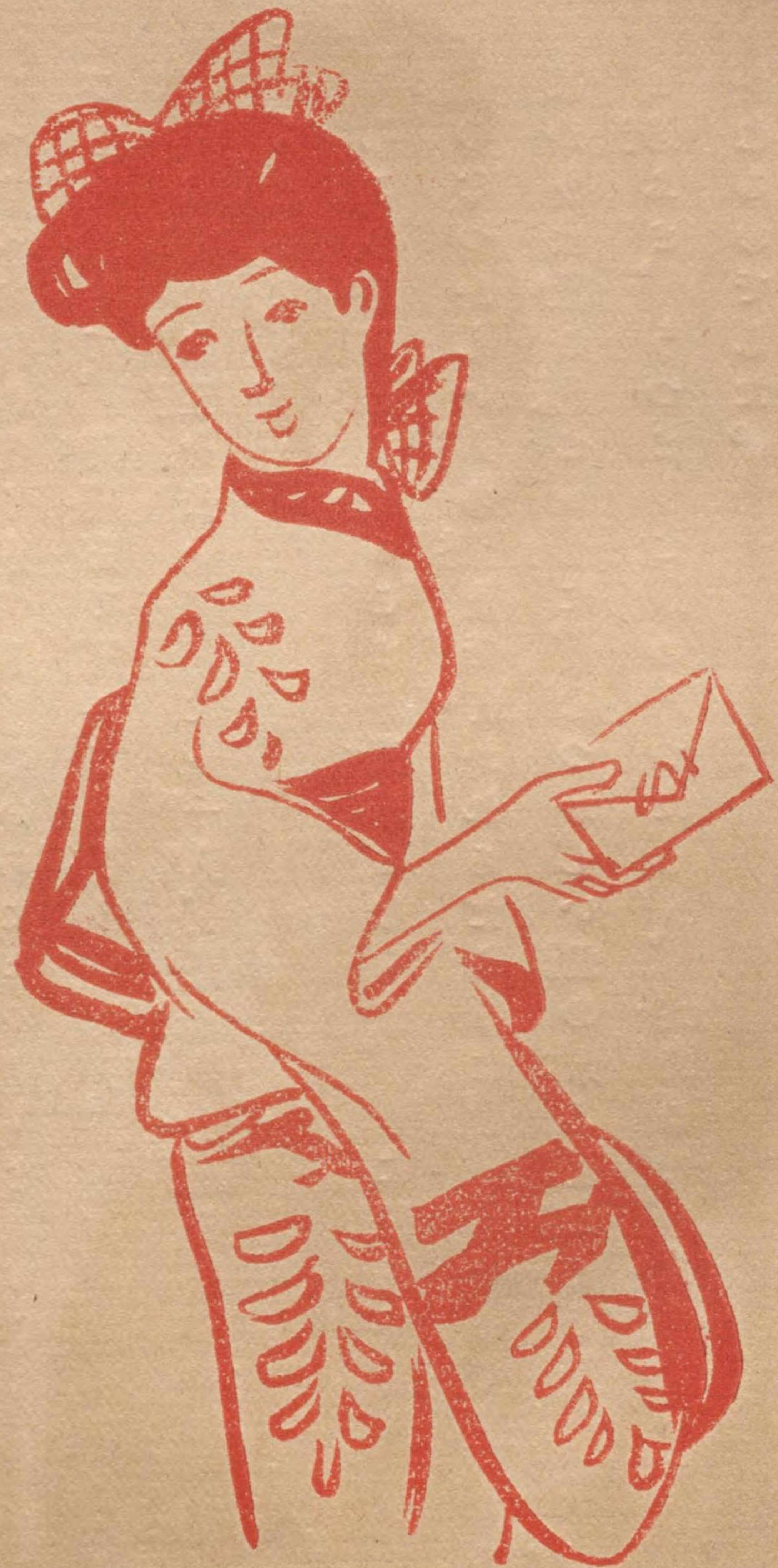
桃色の封筒

「た手紙取返し、さつこねー」

ど、かたゝ紙束して来た悲しい日は、いつになつても忘れ
ないけれど、なせこの頃には手紙が来ないのだらう。

匂ひ入りの紫インキで細々と書いたたなより、あの桃色の
封筒の封を切つた時、紙の端はどんなに躍つたでせう。あま
りのなつかしさに、今日もまた手紙の中なかからそれを取り出し
て、紙束かみをなやませ返して貰ふだ。

あゝ、さつこねー、たなよりが聞きたい。



「のちよん
とけんほしや
そ」



逝く花

南へ南へと流れて行く水。流したもののたもとに
 花びらを載せて、何處まで流れて行くのでせう。
 花子は疲れた足を曳いて、たゞ一人、肩木が小川の
 に立ちました。

この身が花と散ること、出来をなすは、くも散るて
 の國のなつかしい人の傍まで行かれるだらうに。
 なつかしい花の家の庭口まで
 立ちました。



小 猫

「私に似たたつてかゝり、お茶にはたをを
 けたちやアなにか、ねクエー、あら、三毛も
 白も秋の裾にじやれてるわ、ホ、ホ、ホ、怒
 らなくつてもいゝのに……」
 なつとも内所て連れ出すた殿様に、なかく
 油断は出来なにも、ク、ク、ク、眼はかやしく光つ
 てゐる。



寄

寄宿舍の窓

室内には華やかな電燈がまばゆく輝いて、四五人の遊学生は、机を囲んで楽しい談話に興がつてゐました。
 ところが一人は一人にうつて、柔らかな胸に委けられた。
 窓を覗くと、夕やみ迫る空の青さを眺めながら、しん
 とした。ほんやりとさうして、このかたに輝く星が
 輝いてゐる。遠くの方から、何の音もあかぬさうな
 音に聞かされて来る。その美しい不安な夜の世界を、ま
 んまうと、ゆり子は何物までも御身までもあから願はせ
 へてした。

花をかざして

「面白かつたのねわ。」

「わ、私今日は随分転婆したり、何だか斯うそゝられるやうで、ちつとしては居られないんですもの。」

「さうよ私も。……でも、もう今年だけだわねわ、斯うして遠足に行けるのは。」

「最後の遠足！ 思ひ出になるわ。」

「ほんとにこの花が、いつまでも散らすに居ると好いけれど。」

「記念の花ですものねわ。」

「来年の花の頃は、何處の空で、誰とゝもに遠足をするこゝとやら、女と生れた身の、行く末は定めがたい。」



お
ち
梅

「お佐ちゃん、また梅を拾つて来たの、厭だわね。」
「お佐ちゃん、梅の葉を拾つて編む毎に、お母様はいつな
節をしてた呢りになりました。」
「なせ母様はこれが厭なの、綺麗ぢやありませんか。」
「でも落ちた梅は、何だか氣になつて厭なんだから……拾
て、おしまひ。」
「言はれても、お佐ちゃんはやつぱり、梅が好きなのです。」
「今日もまたお寺の奥庭へ行つて、おち梅を拾つては、念も
なく縁につないで居ります。」



つみ草

羊の梅のやうに柔らかな若草の上に、美也子はぐつたりと座つて、摘みためた草花を、そこに擴げて見ました。

さびしい郊外の別荘に、病める身を養うてゐる美也子には、かすみの花を持つて歸つたとして、共に喜んでくれるお友だちはありません。たゞその一本を押花にして、都の親しいお友だちに送るばかり。

それでも美也子は、日ごと野末をさまようて、たゞひとり草花を摘むのが、唯一の慰めなのであります。



かくれんぼ

「もう好いの？」

「まあだよ」

「はあやくよ」

屏風の蔭から花子さんは覗きました。

健ちやんが押入れを開ける音が聞えました。

「あ、押入れたな」

と思ひましたけれど、花子さんは知らぬ顔で、

「もう好いの？」

と、また催促しました。

「もう好いよ」

こいふ聲が、ぼんやりきこえました。





新入學

門の系柳は、柔らかな青い芽を吹きました。
 神秘なさゝやきを、わかい人々の胸になげ入れてゆくやうな春の風は、野にも山にも漲つて、たもむろに動いて居ります。
 望み多い新學期に就かうとして、いく組ものリボンの群が燕のやうに軽い様子で、華やかな笑まひどころに賑はひ行く朝でした。
 綾子も同じやうに、メリンス友禰の風呂敷づゝみを片手にして、ひとり道を急ぎました。ペンキ塗りのいかめしい校門を忍びやかにくぐつた時、綾子はささくんの思ひに、血潮の湧き立つのを覚えました。上京！遊學！郷里！新らしい友！と、さながら走馬燈のやうに。



マタアレタ
アソバウネ

あばよ

「蛙がなくなからからかへろ。」
と、わりうちちゃんが思ひ出したやうに言
ました。

「私も、もうかへろ。」

といつて、たかちやんは、まごごの玩具を
いそいで片づけました。

「まだ明日あそぼうね、あばよ。」

と、わりうちちゃんはお家の方へさっさと歸り
ました。

「わりうちちゃん、あばよ。」

春の宵

初めて結うた高髷、なつかしい名よ初島田！

嬉しいやうな、恥かしいやうな、さてまた誰かに見てもら

ひたいやうな、落ちつかぬ気がして、明るい灯かげにちつこ

座つて居るに堪へませんでした。

そつとた坐敷をぬけ出て窓に倚り、うつさりと庭の面を眺

めやりました。外はたほろに霞んで、ほてつた頬に吹く風も

なつかしい。——春の宵、初島田。斯くして少女の胸に

打つ波は、次第々に高まつて行くのではありますまいか。



春の宵





蝶の行方



蝶の行方

春代は、うつろつと夢のやうに見つめました。
 ツの蝶はもつれぬがら、葉しさうに彼方
 へと飛んで行く。花の香を含んだ風が、そら
 かに春代のリボンを揺かせました。
 「何處まで行くのだらう？」
 と見送つて居ると、身も心もかげろふ燃ゆる
 空に溶けてしまひさう。
 春代の魂は蝶さへもた、遠く詩の國に遊ん
 で居るのではありませんまいか。

無邪氣な失望

「きいちちゃん、お遊びな、今は、また人形を
連れて来たの、入らっしゃいよ。」

「あら、なぜ遊ばないの、入らっしゃいよ、
人形貸したげることよ。」

「きいちちゃんは黙って行つてしまひました。
よつちやんはほんやう見送りしました。」



櫻 草

淡紅色の小さい花をつけた櫻草が、鉢のまま、ラトブルの片すみを飾つてゐる。久子は讀みさしの日本歴史を閉ぢて、つかれた眼をこの可愛い花に注いで、ちつと眺めてゐたが、花の数を一つ一つかぞへて見て、美しい眼にさも嬉しさうな笑みをうかべた。

「ちやうど八つ咲いてよ、迷信のやうだけれど、としちゃん今年と同じになつたから、明日こそ持つていつて上げやう。」心をこめた贈りものに、としちゃんの病は日ならず快くなることだらう。



お父様

「ナンノ、ナンノ」と、茶の間の時計が四時を打つと、ゆり
ちやんは、びつくりしたやうに顔をあげて、
「あら、もう四時だわ。」
と、そこらに散らかしてあつた小巾を取片づけ、急いで戸外
へ駆け出しました。
垣根にもたれて、今か／＼と待つてゐますと、遙かにお父
様の帽子が見え出しました。ゆりちやんは飛び上つて、「お父
様、ナンノと呼びました。」
今日は、何かお土産を買つて来て下さつたか知らず？





お葉さん

「あら、燕がもう来たのかしらん。」
「お葉さんは読みかけてゐた小説本を膝に置いて、店の方
をちつと見た。さがみやと白くぬいた古びた紺暖簾が、ハタ
一丈と風にひるがへつて、往來のはしやいだ埃が、烟のやう
に店前をとざして、むせつばいやうな気がする。お葉さんは、
「ちよいと庄どん、燕が来たやうだね。」
と、なま欠伸をしてゐた番頭の一人に聞いた。
「へい、昨日あたりから見えますよ、暖かになりました。」
なア
と、氣のない聲でいつて、ちよつと燕の囀居を見上げた。
お葉さんは、いつまでも燕の出るのをまつてゐるやう……

午後三時

先生のた家には、お母さまがゐらっしゃいません、おちやんもありません。
先生はた家へ歸るよりも、可愛らしい生徒と一しよに、平気で遊ぶ方が嬉しいのでした。生徒は最後の鐘を待ちかねて、みんな歸つてしまひました。
午後三時は、先生に取つて寂しい時ではありませんでした。





窓の小鳥

玉ちゃんは夢見るやうな眼をして、御本の
復習をして居りました。

窓では小鳥が見守歌を歌ひました。

玉ちゃんは、天切の御本が落ちたのも知り

ませんでした。石は暖かい。何時のまにか

かすかに漏れる小さな寝息！



千代さんへの手紙

故郷より

千代さんからのなつかしい手紙！ その人をまのあたりに見るやうな気もちで、急いで封を切りました。……この山深い里にも、木の神様は言づれ給うて、花は美しく咲きました。去年、あなたと御一緒に、桜草を摘みに行った所ね。そこ、あの小川がぐの字なりたうねつて居るにどう、そこには去年と同じやうに、美しい花が咲いておりました。……

と、お前の話からまた海江の話を。……

女中の花かと思ふと、色は淫せても、たゞ涙もなてなかつた。

人形の名

顔すりしてみたいやうな顔の色、眼は大きく開いて、水色にすんでゐる。

ロンドンにゐらつしやる兄様から、「誰かの
 顔に似たりやうな顔の、はるくや送つ
 て下つた人形。様々な可愛い顔をし
 てゐたのかしらん。

「それは私の好きな桃子とつけやうかしら、で
 小太郎様に何つてから。」



活動寫眞へ

「お父さま、さあ行きませうよ。」

「何處へ？」

「あら、お父さま知つてらッしやる癖に。」

「さうかね、でも思ひ出せないよ。」

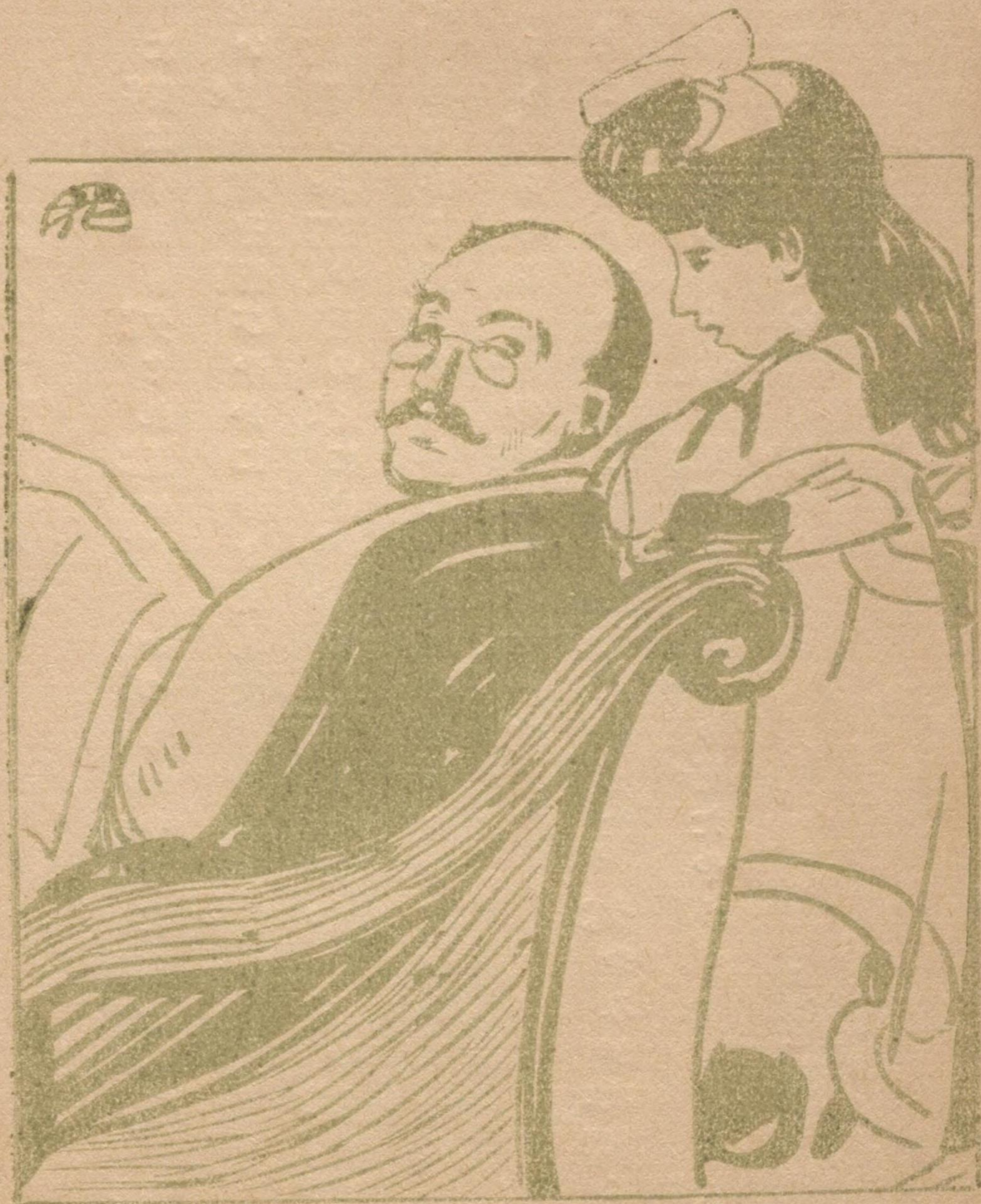
「あんなこと……早く連れてつて頂戴な、

お父さま！」

「だから何處へよ。」

「活動ですよ、私もうちやアんとお支度が出

来ましたの、さあ早くよウ。」



暮れ行く町

た安は今日も夕ぐれ近い頃、いつものやうに家を出て、寂しい屋敷町を忍びやかに歩きました。

彼方の小高い丘の上には、名にし負ふ柳田家の白い西洋館が、さながら王城のやうに聳ね立つて居ります。

『あゝ、あの西洋館の南に向いた一室！』

と、た安はなつかしげに遠く見上げました。夕やみが次第に迫つて、さながら白い壁ばかりが浮き出たやう。—— た安

はいつまでもその窓を見つめました。(少女物語「たそがれ」の一節)



ポチの悪戯

伯母さんに頂いた人形を、お隣の花ちゃんに見せてあげようと思つて、安子さんはいそ／＼と表へ駆け出しました。

玄関の側で晝寝をしてゐたポチは、その足音に眼をさまして、いそいで安子さんの後を追つかけました。

ポチは勢ひよく駆けつけて、いつものやうに安子さんの裾にじやれつきました、安子さんはビックリして、人形を取り落しました。と、ポチはいきなり人形の着物を銜へて振りました。

人形は着物を引き裂かれても、平氣な顔でニッコリとして居ります。



海の彼方

真帆片帆の行き交ふさま、ほんとに美しい眺めだけれど、遠く海の彼方を、斯うしてちつと眺めて居ると、私なせか悲しくなつて来る。

こんな果てしも知れぬ大海原の真中に、たつた一人であつたら、どんなに寂しいことだらう。どちらを向いても、何にも見えないで、たい波の音ばかりがザア／＼と聞える、ほんとに私、さう思ふだけでも寂しい。私なんかは母様も姉妹もな
いんだから、たつた一人で海の真中へ棄てられたやうなもの。
真帆片帆がせめてもの心やり、はかない身よ。



真帆片帆

西洋料理

繁ちゃんの一番好きなものは、西洋料理です。兄さんと喧嘩をして、アーンアーンと泣いてゐても、西洋料理の御馳走があるといふと、すぐに泣きやんでしまひます。

それでも繁ちゃんは、ナイフで肉を切るこゝが出来ません、繁ちゃんのお皿には、匙がつけてあります。



たばしま

郁子は欄干に身を寄せて、鏡のやうな海の面を見つめた。
日は今、地平線上一尺のところに懸かつて、サツと金鱗を
波の上に漂はせた。どこから来たのか、數十の鷗があわたい
しさうに群れ飛ぶ。

「翼はなくても、せめて自由の身だつたら、なつかしい海の
彼方に……………」

と、郁子は今さらのやうに、わびしい思ひに満たされた。

戀しい人にわかれて半年、郁子は悲しい心をかよわい身に
包んで、日ごと空行く鳥を羨やんで居るのである。





寫眞

古い雑誌をさがしてゐたら、戸棚の隅から出て来た寫眞。ごこの赤ちゃんだらうかと、いくら考へても解らないので、お母様に尋ねて見たら、まあ！これが私の子供の時だつた。

ふつくりとした頬、鈴のやうな眼もと、私にも一度はこんなあざけない時があつたのか知ら？

十八年の昔のさまよ。

忘れ物。

『お父さん、これでせう。』

と、出窓をあけて紙入を差し出すと、

『うん、それく。あんまり急いだものだから。』

ら。………ごうも可笑しいと思つたよ。』

お父さんの顔には、キマリわるさうな、而

も安心したやうな色が見えました。





か い み

いつぞや『少女スケッチ』といふ書物を読んだら、鏡を見ぬ少女のことが書いてあつた。

乙女十六、花のさかりに、鏡を見ずに居られるだらうか、私わたしは一日も鏡を見ずには居られない。

顔が美しいからとて鏡を見るのではない、さりとて醜いからでもない。——自分の顔が鏡にうつるのを見る毎に、嬉しい氣もするし、心細いと思ふこともある。自惚か悲觀か、私わたしにはわからないけれど。

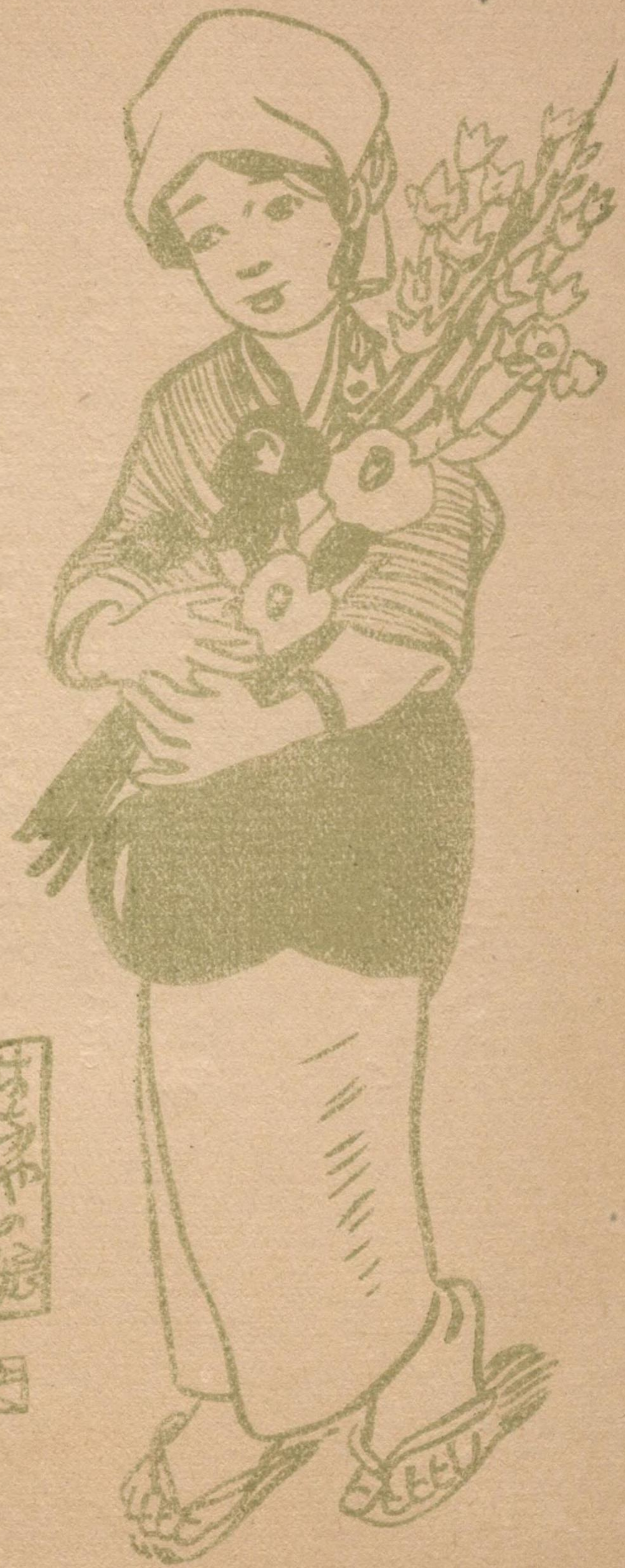
花屋の娘

父の顔は知らず、兄妹には早くわかれ、たつた一人の病める母をたよりに、花を賣つて貧しい生計をほそく立て、行く、美しいのと孝行なとの評判の娘。

近所の小母さんたちが、「ほんごにあの娘は感心な」と褒めて下さるのを聞く毎に、彼女は譯もなく心に勵みが出て、これでもまだ生き甲斐があると思つた。

『早くた母さんが快くなつたら……』

と、今日も花を抱へて店前に立つ、花屋の娘その名はた花。



花屋の娘



紙風船

わ隣りのよつちんが、わ庭に出て紙風船をついて居るのを見ると、いくちやんは羨やましくなつたので、わ母さんにせびりました。

『わ前は一つもつけないぢやアないか、去年も皆破いてしまつたのに……』
と、仰つしやいましたが、いくちやんは、ごうしても聞かないで、とう／＼買つて頂きました。



紙風船

お前に罪はない

お伽噺ではお馴染みだけれど、ほんとにお前は怖い顔をして居る、その眼で睨まれたら、大抵のものが逃げてしまふわ。可哀さうに、こんな所に繋がれて、どうすることも出来ないわねね。それでもお前が鸚鵡だったら、毎日私がお相手にして遊ぶんだけれど、醜い木兎では、誰も相手にしてくれないわ。でも、お前に罪はないわねね。

人間にだって、お前に似た運命のものが多いんだよ。私も



考へ事

「叔母さまが仰ッしやつたこと、あの通りなら好いけれど、何だか私氣が、りで仕様がなない。」
わ峰は四邊に人の居ないのを幸ひに、縁に腰をわろして考へはじめました。家のため親類のためを思ふと、叔母の仰せに従はなければならぬが、それでも何となく不安なやうな氣がして、わ峰は何れとも決しかねました。
考へては打ち消し、打ち消してはまた思ひ出し、はては、自分で自分の心がわからなくなつて、うつとりとしてしまひました。



うつと



雨の日

幼稚園から帰る時、

雨がドン／＼降つて来た、

風はヒュー／＼吹いて来た、

ふみちやんは傘の柄をしつかり握つた。

誰も通らない寂しい道で、

ふみちやんは泣きたかつた、

泣いても仕方がないと思つたから、

我慢してまた歩き出した。

泣かずに家へ歸つたら、

母さんが褒めて下さるだらう。



ね
人形

奈良の高等女學校へ行つた時、寄宿舎の中庭を散歩して居りますと、ふと或る室の床の間に、愛らしい人形が置いてあるのが眼につきました。

「あ、ね人形が……まあ優しい！」
と、思はず延び上つて眺め入りました。ね人形を可愛がる少女は、きつとその心根もやさしいのだらう、寄宿舎の窓で物學びながら、なほね人形を手離さずに居る少女は、どんなに美しい少女だらうと、一しほゆかしく感じました。その印象は、今になつても忘れられません。



みいちやんの顔

『みいちやん、どつちが好いの、林檎？ それともバナナ？』

『ね、どつちも好いわ。』

『オホ、、、みいちやんは巧いこと言ふのね。御覧なさいこの林檎、みいちやんの顔のやうぢやありませんか。』

『あら厭だ、母さん。私そんなに固かアないことよ。』



どれが好きでせう

あの縞のも厭だし、もう襪紅色ぢやア少し派手だし、どれが好きでせう？ 私困つちまつたわ、姉様に一所に来て頂けばよかつたわね、ほんとにどれにしませう？

薔薇の花もよく出来てゐてほしいけれど、明日は皆さんが下髪になさるんだから、私ひとり束髪にするのも厭だし、やつぱりリボンの方がいゝわね。いつそ思ひきつて、白緋子が好いかも知れない。……でも、何だかあんまり淋しすぎるやうね、どうしやうか知ら、ほんとに迷つてしまふわ、どれにしませう？



玩具ノ熊

静チャン ハ オモチヤ ガ スキデス。
玩具箱ニハ オ人形ダノ ゴムマリダノ フ
ウセンダノ イロンナモノガ 入レテアリマ
ス。

昨日ノ日曜ニ 静チャンハ オ父サン ト、
新橋ノ オモチヤ屋へ行ツテ 玩具ノ熊ヲ買
ツテ イタダキ マシタ。ソレカラ静チャン
ハ 熊バカリヲ 抱キアルイテ ヲリマス。



逝く春の雲

逝く春！ 何て淋しい餘情のある言葉なんでせう。秋のあ
 はれは、自然の淋しさなんでせうけれど、逝く春はちやうど
 歡樂の夢の將にさめんとする刹那？ さうね、何といつたら
 當りませう、花やかな悲しみ、まアさういつた、覺悟もない
 のに無理にさめなければならぬ時のやうに思はれますの。
 而して雲のたゞすまひまで、身にしみとど迫るのではな
 くて、ふうわりと淡く浅く、風のまに／＼消ねるやうな、何
 ともいへぬやうに見えますのね。
 夕方など緑の柱に身をよせて、ゆく雲のはかない色に、柔
 らかな涙が頬を傳ひますの、やつぱり逝く春ですわね。



蝶の墓

花から花へと、美しい綾を織つて飛び舞うた胡蝶が、今朝は冷たい土の上には

『まあ可哀さうに、死んでるのか知ら？ 何の苦もなさうに、あんなに飛び廻つてゐたのに、はかない生命だこと』と、少女はやさしい手で蝶の遺骸を拾ひあげた。

花に先だつて、はかなく失せた美しい靈は、何處をさまよつて居ることだらう。たつた今まで、わが世の春を影つてくれたものと思へば、小さな軀でも、このまゝ捨てるには忍びない。そつと庭の片隅に葬つて、立てた塔婆に『蝶の墓』と、その字はやさしい。





負けをしみ

「私、好いもの持つてるのよ。」

「私だつて持つてるわ。」

「見せて頂戴な。」

「いや！ あなたのを見せなくつちやア。」

「あなたからに見せなさいよ。」

「いやアよ。」

「いちわる！」

「いちわる！」

「そんな意地わるとは遊ばないことよ。」

「私だつて遊ばないわ。」

二人は睨み合ひましたが、ごちらも負けませんでした。



武坊の自働車

「姉ちゃん、自働車！ 僕の自働車、好いだらう。」

武坊は大威張りで、玩具の自働車に乗って見せました。が、いくらハンドルを持つても動かないので、

「姉ちゃん、見てゐないで押しとくれよ。」

「ちやア武ちゃん、自働車ちやアないわ、押働車ね。」

武坊は「だって、だって」と言ひながら、箱の中で身体を揺つてゐます。

波の戯れ

浪子は、いつの間にかスル／＼と海の底へ分け入りました。道まく大濤をくいつて、下へ／＼と身を沈めますと、小石の敷もかぞへられるほど鮮やかに明るい。と見る彼方に、キラリと美しい光るものがあるので、いそいでこれを両手に取り上げました。水晶の箱に入つたきらびやかな寶玉、龍の腮にあるといふ夜光の珠も斯くやとばかり、浪子は嬉しさに、前後も知らず水面に浮び出ました。と、波も消ね、珠もなくて、身は柔らかな褥の上に。浪子は美しい夢を見たのでした。





時計

まあちゃんは、時計の短い針がXの字を指す時をよく知ってる。

「まだか知ら？」

と思つて見上げますと、まだXの字ではありませんでした。

「いやな時計、あんな所で止まつて居るんだもの。」

まあちゃんは、毎日十時になると、た菓子（かし）をいたゞくのでした。

昔の春

秋美守は裏門からぬけ出て、若草の色美しい野末をさまよ
ひました。

「たや、もう麥の穂が出た。遅く春、初夏、卯の花
と、何だかなつかしいやうな、待ち設けられるやうな、名残、
惜しいやうな感じがして、空高く啼る雲雀の聲までが、一種
あわたいしいメロデーに聞えるのでした。

「ひねばりはあがる」
、舞張りあげて無邪気に歌った昔の春を、夢のやうに忍ん
で見ました。



こぼれ種

陽炎の燃ゆる暖かい日をうけた垣根に、すみれ、たんぽぽにまじつて、やせくた菜の花が咲いた。こぼれたものからでも、春が来れば芽も出るし花もさく。

乙女十六！ 知る人がなくても、リボンの色は春の野にふさはしい。





わかれし友

「綺麗な繪ハガキねわ」

アルバムを開けて、一枚々々繰つて行くと、ぼちやんは夢中に喜びました。

「これ綺麗ねわ、何誰から来たの？」

「これはネ、姉さんの友だちから」

「何ていふが」

「ぼちやんの知らないがよ」

「さう、でもお名前は何ていふの。」

「ね、長谷川さん」

と答へて、わかれし友の身の上を、今さらなつかしう忍びました。

人知れず



ピツクリ箱

兄サン ガ 東京。カラ 買ッテギテ、クダサツタ、オミ
 ヤダ。喜美チヤン、ハ、ハヤク、アケテ、見タクテ、タマリ
 マセンノデ、

「コレ、アタシ、ニ、クダサルンデセウ」

ト、イキナリ、縁側、へ、モチダシテ、アケテ見マシタ。

アケテ、ピツクリ、「ソアツ」

喜美チヤン、ノ、オドロイダ顔、ヲ、ゴランナサイ。



妙様に

『二つだけ取らうかしら。』

と、匂ひすみれの小鉢を眺めて暫らく考へた。

「何だか可哀さうだわね、折角斯うして咲いたものを」

と、出しかけた手をまた引く。

「でも他の人ぢやアない妙様の悪なんだから、思ひ切つて」

と、堪忍して頂戴よ。

と、そつと手を觸れると、小さい花がかすかに揺れる。

とうとう紫の小さい花を手にして、そつとキツメすると、

なつかしい甘い匂ひがする。これが遠い妙様のみ手にふれる

まで、色あせにゐるてくれ、はい、おれど

待つ身

もう三時よ、なせ入らッしやらないのだから。さつと一時にッてお約束したのに、ほんとに待ち遠しいわ。

あんなにお約束してたさながら、まさか入らッしやらないことはあるまいけれど。

戸外まで出て見ようか知ら、待つ身は苦しいわ。





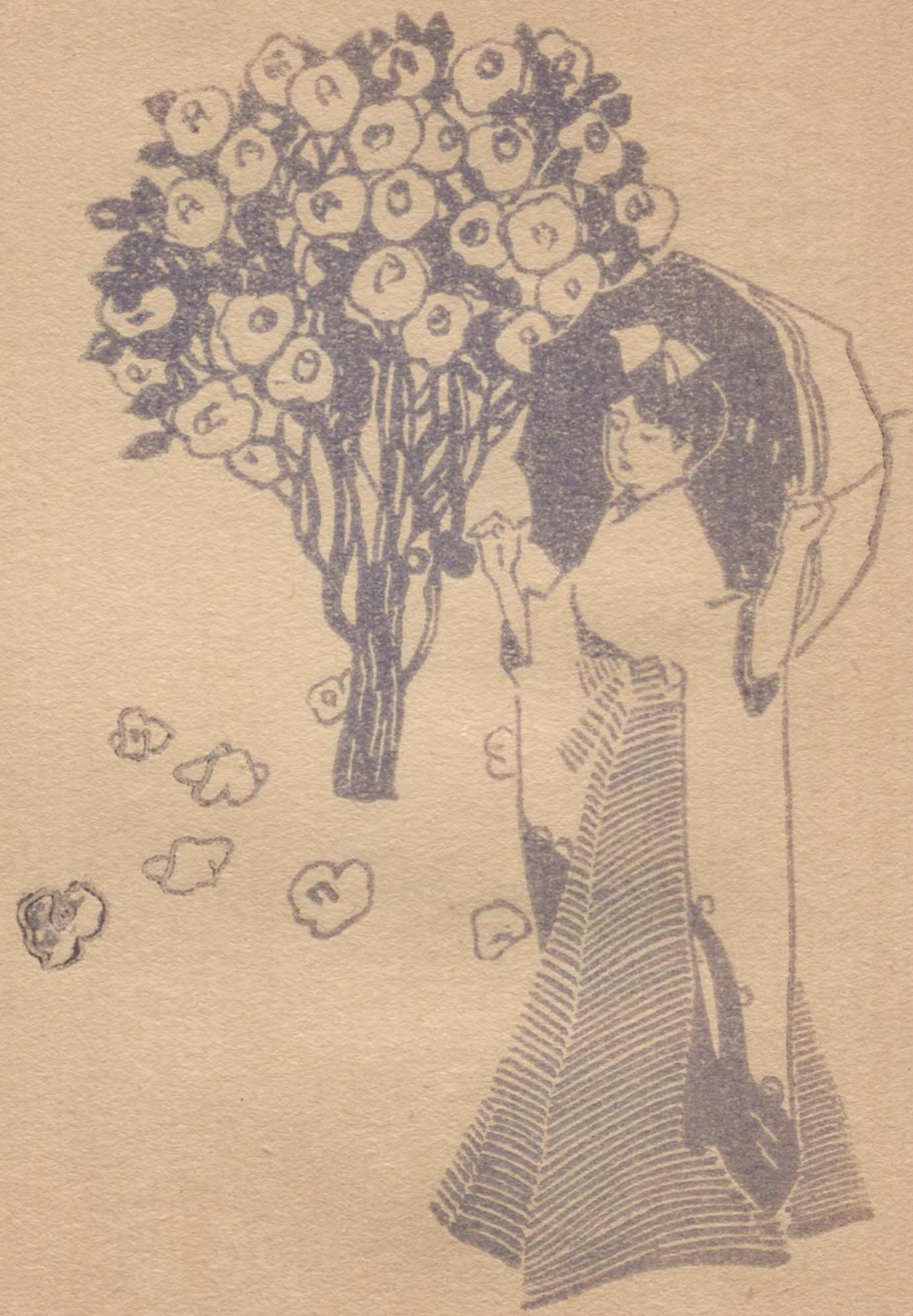
ジョンと三毛

ジョンは千代ちゃんのお友だちでした。それはま
 だ千代ちゃんが小さかった時分のこと。
 お庭の花壇で、千代ちゃんはジョンと遊んでたことが
 幾たびあつたか解りません。
 ジョンは大きくなりました。千代ちゃんも大きくなりました。
 た、千代ちゃんはお母さんの家から小籠を頂いてきました。
 小籠の三毛は、いつでも千代ちゃんに抱かれて居ますけれ
 ど、ジョンはもう可愛がられなくなりました。
 ジョンは千代ちゃんを遊ばせたいと思ひました。



妹よ

わなつかしい姉さま！ 只今はお写真ありがたう、私
 ぐ机の前にかざりましたの。
 姉さま、寄宿舎は賑やかですよ、みんなで騒いでばかり居
 ますわ、だから私、ちつとも淋しくはないけれど、友達の
 物が着て見たくなりましたの、ホ、ホ、。だつて姉さまのお
 写真を見たら、振袖が戀しくなつたんですもの。
 今度のと休みには歸りますから、姉さま、私にも振袖を着
 せて頂戴いな、而して紅緒の草履をね、ホ、ホ、。早く歸り
 たいわ。姉さまさつとですよ、左様なら。 寄宿舎にて。



この木の下

ポタリと一つ、二つ、三つ、見る／＼中に
毒々しい色をした椿の花が落ち散る。

母様にねだつて、この花を拾つては赤い絹
糸につゞり、かぶきりの頭を巻いて嬉しがつ
た昔が忍ばれる。—— やつぱりこの木の下
だった。



兄様のお歸り

あの賑カラだった兄様も、見違へるほどハイカラになつて
 るらッしやることだらう。三年もアメリカの空気を吸つて
 らしたんだもの。

た歸りになつたら、こんな奮趣味な部屋では、お氣に入ら
 ないだらうけれど、せめて裝飾だけでも西洋風にしてたま
 へ。學校で室内裝飾法を習つた私の手際を、どう思つて御
 覽になることだらう。

兄様の好きな油繪の類、少し光線の工合がわるいけれど、
 壁の色の調和が好いから、こゝに懸けてたまませう。
 天洋丸は、その道を通つて居るのだから。



お葉子頂戴

「私、おとなしくお留守番したのよ母様！」
 と、おみちやんは今まで抱いておたた人形を放りだして駆け
 て来ました。

「それはお懶巧さんでしたわね、何して遊んでおたたの？」
 と、おみちやんはなつたばかりのお母様は、少し赤らんだ顔
 で、ニッコリなさいました。

「あのね、あのう、お人形さんを寝ねさせておたたのよ、私に
 とおなしかつたのよ母様！」
 と、おみちやんはお母様に謎をかけましたが、こんどは思ひ
 きつて、

「母様、私におとなしかつたんだから、お葉子頂戴。」
 といつてニッコリ。



アミモノ

キミチヤン ハ ケイト ノ キンチヤク

ヲ アンデヲリマス。

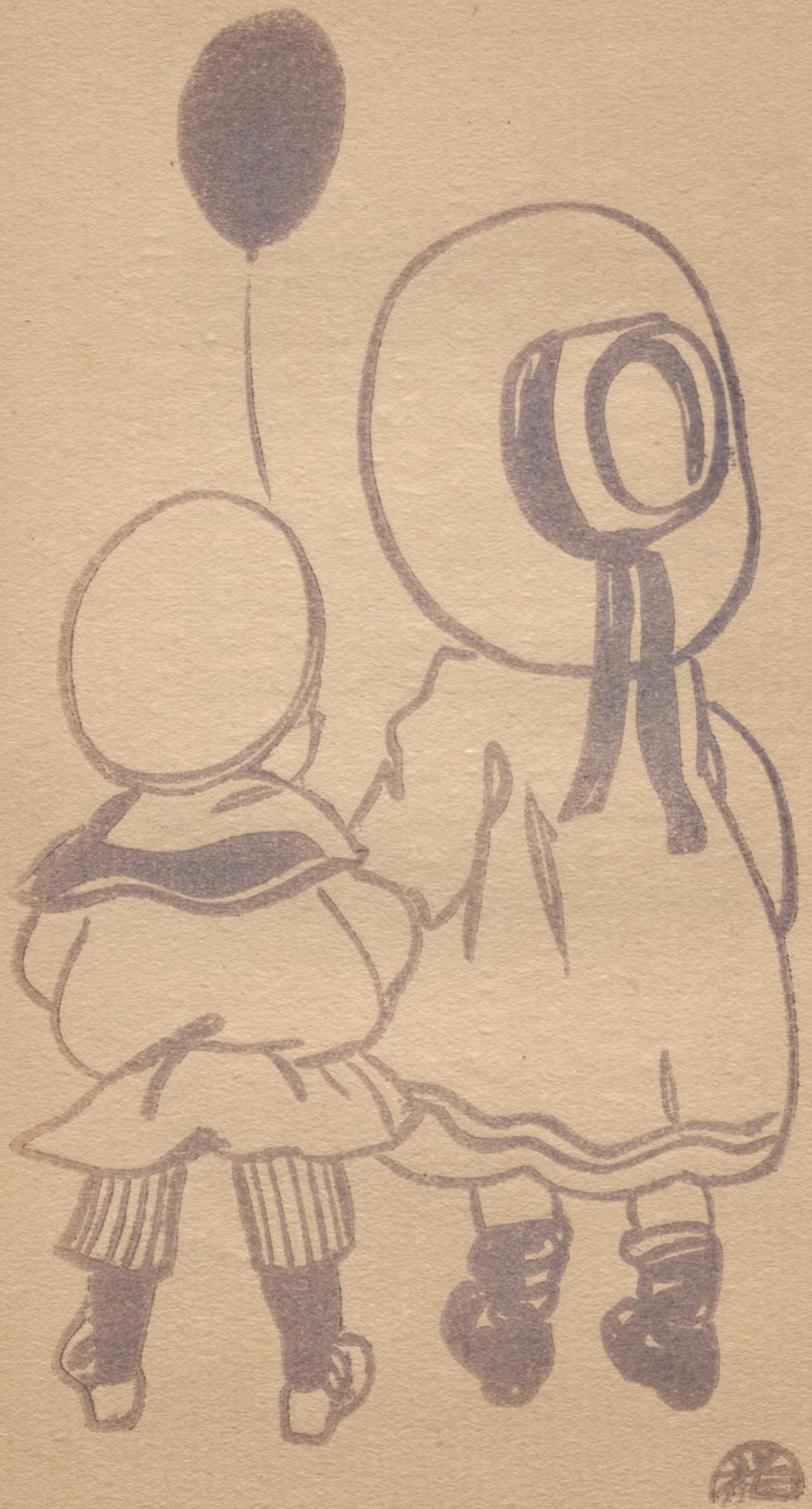
武兄サン ガ ホシガツテ キルケレド、

兄サン ハ イデ ガ ワルイカラ マダ

ナカク アンデヤリマセン。コレ ハ オバ

アサン ニ アゲヨウ ト オモツテ ヲル

ノデアリマス。



フリーセン

「姉ちゃん コレ フリーセン ダネ。」

「エ、ソウヨ。ソノ糸シツカリ持ツテキナイ

ト、アガツテシマフコトヨ。」

「ナビ アガルノ？」

「ダツテ フリーセン ダモノ。」

「フリーセンツテ アガルコトナノ？」

「ソウデヤアナイケレド、フリーセンダモノ。」

と、姉さんは知つた風に説明しました。



鶏小屋

二階の娯樂室に集まつて、みんなでさまざまの話をして居る時には、なつかしい郷里のことも、戀しい母様のことも忘れて居るけれど、長い廊下にぼんやり佇むと、寄宿舎生活のわびしさが沁々と味はされる。自修室に入つて、ちつと机に向ふと、なほさら淋しい思ひになやまされて、別れた古い友だちのことが眼の前に浮んで来る。さういふ時には、誰に心の中を打ちあけることも出来ないで、たゞもう遺る類なさに裏庭へ出てしまふ。庭の隅に幾羽かの鶏が、狭い金網の中を天地として、しょんぼりと佇んで居るのを見ると、これも自分と同じ運命にあるやうな気がして、そぞろ哀れを催す。あはれ寄宿舎の鶏！わびしいのはた前ばかりではないのよ

公園のベンチ

「やつぱり御気分がわるいこと？」

「いゝね、もう何ともありませんよ」

と、のぶ子は白い歯を見せてニッコリ、初夏の日が、若葉の
間から、チラ／＼と柔らかな二人の頬に流れて来ます。

「さう、でも早く快くなつてよかつたわね、さつきはいや
なれ顔色だつたから、心配したのよ。」

と、まさ子は並んだ友の顔をそつと覗きました。

「有難う、こゝへ来たんで、すつかり病が癒れたからよかつ
たのよ、虫歯つて厭なものね、これからそこらを少し歩き
ませうか？」



公園のベンチ

母なき少女

貧しいながらも、親子三人平和に暮らしてゐた時には、た
 信は見ても可愛らしい、いきなりした少女でした。
 父が野に出で働いてゐる間、母は御飯を炊き着物を縫
 つて、父の帰りを待つ。た信は母の傍で餘念もなく遊んで
 ました。餅し、餅し、それは遠い幼少物語！今は
 た信の心に晴い陰が宿つて居ります。
 母にわかれたた信は、毎日山に出る父の後影を恨めしげ
 に見送つて、ぼんやり丘に立つ文れの子となりました。



仲よし

毎朝、散歩に出た際、鳥居坂の中ほどで多くの小学生に出遇ふ。メリンスの風呂敷づゝみを片手に、氣取つてゐる子供があるかと思ふと、學校袋をさげた可愛らしいおかつばさんもある。

それ等の生徒に交つて、眼のバツナリとした七八歳の少女が、同じ年位な洋服の男の子と、いつでも手を組んで親しうに話しながらあるいて行く。私はその無邪氣な少年少女を見る毎に、ひそかにほくそますには居られない。



楽しい別れ

「ぢやア、ほんとうに嬉しいのねわ。」

「はうさうよ、私もさう思ふと胸が躍るの。」

楽しいさうやかに、二人は夢中であるさました。

「あら、あんまり嬉しい話をしてゐたので、

もうこんな所へ来てしまつたわ。」

「まあ、私らつとも知らなかつてよ。」

「もつと話をしたいけれど、また明日ね。」

「さうだよ、ほんとに明日が楽しみだわねわ。」

左様なら！」

「さうか、左様なら……」



蛙の凱歌

花に誘はれて、子守女は野末をさまよひました。遊ぶのは音の子が邪魔になるので、女は、さある丘の上に子供をたもしました。

子供は四邊の草花を撈つて、無心に遊んでゐました。ふと、雨蛙が膝の上に飛びあがつたので、子供はびつくりして泣き叫びました。

が、蛙は落ち来る涙を落びて、「フレイフレイ」と凱歌を奏するかのやう。

蛙の鳴く音も子供の泣き聲も、子守女の耳には入りませんでした。



園遊會

築山の四阿には、紅白うつくしい提燈が張られて、赤い提燈が春の風にゆらいで居る。
 そこからは、繪のやうな海の花が見渡されるので、きらびやかに着飾つた客人は、われもくと提燈の間から小手をかざして眺めやりました。
 美鶴子は華やかな群を離れて、たゞ一人、わざと寂しい木陰の茶屋の椅子に腰をたたましました。海の花を眺むたのめ、半ば飲み残したコーヒと茶碗が、わびしうテーブルの上に置かれてあるのを見て、美鶴子は提燈の影の一種の寂しさを、は、すには居られませんでした。



てふ



蝶々

てふちよ てふちよ

どこまで行くの？

そこで舞つたら

今度は此處へ

ここまで舞つて来て

この花にさまれ。

てふちよとボチと

私と一しよに遊びませう。

涙の匂ひ

綾子はたまりかねて、とうとう春子の胸に泣き伏しました。

「もう、もう私、一生た目におくれないますもの。」

「ほんとに私も悲しいけれど……運命ですわ。」

「ながいた別れですわね、今日限り……」

ヒソと抱きついて、泣けるだけ泣いて、このまゝ身も世も消わてしまへば宜いと思ひました。

髪がねた逆手の胸には、とこしなへに涙の匂ひが染るこ
とでせう。



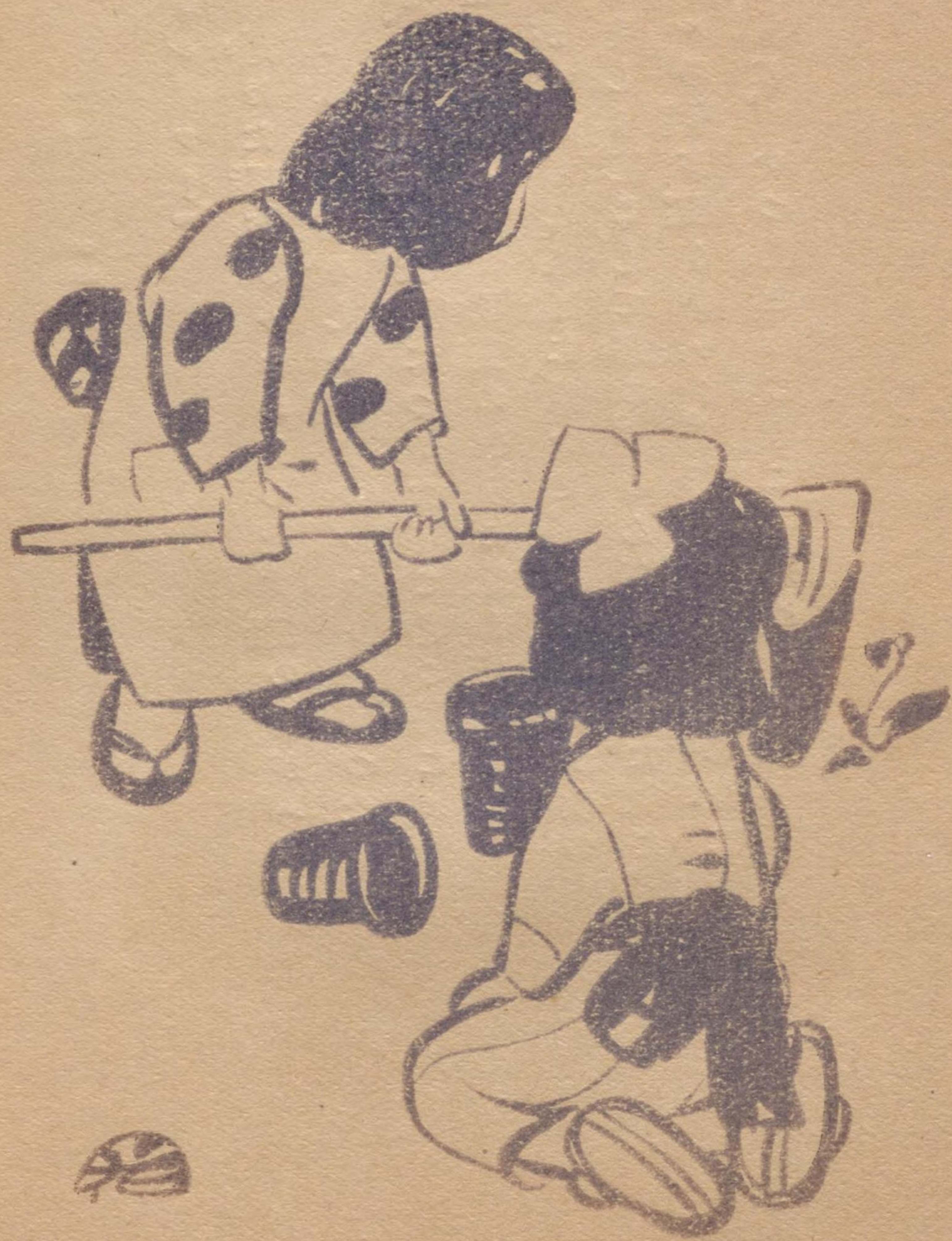
二人の莖

「柔らかな土を入れませうね。」

「わ、それなら大丈夫よ、さつとつくわ。」

斯うして植えた莖は、亦年も更來年も、またその次の年も、同じやうにやさしい花を咲かすことせう。

二人は春を迎へることに、いつまでもこの莖を忘れずに居るでせうか。



テニス

「ブレイザー」

と、冴れた聲がひびきわたった。庭の櫻がハラ
／＼と散る。涼々しい姿でラケットを持った少
女が、靴音軽く位置についた。と見る間にボ
ルは網を掠めて、飛燕のやうに低く飛ぶ。
ながい春の日も西に傾いて、爽やかな少女の
顔を美しく照らして居る。のんびりとした空に、
ボールの音が強くひびく。斯くして少女の胸に
たつ波は、いつ静まりさうにも見えない。





天

禮子さん

「あら、玉ちゃんは何をあげました？」
 「礼子さんは頭をあげました。」
 「玉ちゃん、玉ちゃんはまだ入らッしやらないよ。」
 「だつて、今まで私、一しよに飯事して遊んでたんだら。」
 「嘘ですよ、礼ちゃん、寝ぼけてるのね。」
 「あら、私寝ぼけやしないわ、ほんとに玉ちゃんは何處へ行
 ったの、わゝ母様。」
 「礼子さんは眼を見張りました。母さまは可笑しさをこら
 へて、
 「ホ、ホ、。玉ちゃんは夢を見てゐたんでせう。」
 「まあ、夢だつたのか知ら？」
 「礼子さんは驚く眼がさめました。」

お姫様のお話

「ちやアお話をしてあげませうネ。」

「わう、おももしろいの、してちようだいよ。」

「何のお話が好いでせうねね。」

「あのツね、お姫さまのお話。」

花ちゃんはニッコリ笑つて、お姫さまがのらッしやる美しい御殿を、目の前に見るやうな顔をしました。



寂しい心

福子は読みかけた雑誌を下に置いて、うつ
とりと考へ込んだ。

今讀んだ夾れた話が、何だか自分の身の
上をそのまゝ覆われたやうな気がするので、
「ほんとうに世の中に不幸は盡かない。私ばか
りぢやアないわ。」
と、斯う思つて自慰から慰めて見たけれど、
やつぱり寂しい心は消へなかつた。



恐かアない

「たゝいやアだ、ちつとも恐かアないわ。」

「鞍馬山の天狗だぞ、ワァーッッ」

「たごかしだつて、何ともありやアしないわ。」

それよりやア私、もつといゝもの持つてゐる

わ。だけど、真ちゃんなんかに見せてやらな

いッッ」

真ちゃんはお面よりも、花ちゃんの持つて

ゐるものがほしくなつた。



ソ ナ タ

真赤な燭を吐いて、盛んに燃わたつストログを眺んだ人々の顔は、明るい花電燈の灯かげに照らされて、みんな静はされたやうにうつとりしてゐる。

白い指先がキキにふれる度に、柔らかな曲線をつくつて、高く低く流れるやうなソナタが、聴者の胸に泌み入る。

人々は或ひは憂ひに、或ひは悲しみに、思ひくゝの影を送つて、つく息をさへ嚔つてゐるかのやう。

かくて妻の音は、はしいよ、なま色にたけてゆく。



私ぢやアない

今朝からた隣りで遊んでゐたとよちやんが、お祭へ廻らうと思つて駆け出して来ますと、曲り角の白壁にいたづら書きがしてありました。

「あら、誰が描いたんだらう？」

と、とよちやんは驚いたやうに見あげました。

「こんな所に絵をかいて、おちいさんに叱られることよ、兄ちゃん知ら、私ぢやアないから知い」

とよちやんには「タロウエガク」といふ字が讀めませんでした。



卒業の日

幾とせの間、日毎に教へを受けた懐かしい學び屋！
 その業を卒へて別れを告げる。
 思ひ出の多い母校、親しい友垣と廊下に佇んで、楽しいさ
 さやきを交はしたことが幾度あつたらう、運動場の片隅で、
 人知れず悲しい思ひに耽つたことも教へ切れない。あゝそれ
 も夢！五年の月日は懐かしい夢として過ぎ去つた。
 師の君に別れ、親しい友と袖を分つて、今し「さらば」を告
 げる母校！庭の大銀杏にまで、わかれと願へば名残が惜し
 まれる。――さらば母校よ――



店強勉一本日

際橋新京東
標商

美術流行各種繪はかき出版所

書籍錦繪畫帖舶來額面畫所



東京新橋大通南金六町二番地

木田金盛堂

電話新橋 三三六九番

和洋教育玩具各種

美術東人形製造販賣所

